

くすのき

親和女子高等学校 進路通信 高校3年 2021年度第6号

《あと200日》

いよいよ7月に入ります。共通テストまであと200日。この「200日」をどうとらえるのが大事かと思います。「もう」か「まだ」か、あるいは「別に」か。焦った「もう」と、余裕故の「まだ」、受験勉強を全く理解していない「まだ」、着々と目標に向かっていく故のマイペースな「別に」。あなたの「200日」はどれですか。

《娘の進路》

この9月に娘に二人目の子が生まれ、息子は結婚をする。親として、一区切りがついたな、とホッとする思いです。

娘の高校時代から今に至るまでの話を少し書いてみます。私は、子供らに高校入学の際に言ったことが2つありました。一つは部活をやり続けること、二つ目は大学は全国どこでもいいが、国公立大学しか受けさせない、ということでした。

娘は高校時代、部活に明け暮れていました。吹奏楽部に入り、朝練から昼連、そして放課後の練習まで、部活一色の生活でした。娘の通った高校の吹奏楽部は全国に度々出場する強豪校。高2からは副部長もして、全体を見たりもしていました。おかげで学業成績はぐんぐん下落し、高3になった頃はほぼ学年最下位でした。その年、娘の学年は、結局全国に行けず、関西で止まりました。驚いたのはその後でした。国公立大学しか行かせない、というのは相変わらず言っていましたので、娘は引退をした8月からまさしく猛勉強を始めました。元々何も知識がない状態だったので、やり始めるとスポンジが水を吸う如く、どんどん吸収していました。塾には通いませんでしたから、平日は学校の行き帰りと夕食、入浴以外の時間は、ずっと机に向かっていました。休日は、朝6時頃から勉強を始め、夜中の1時くらいまで、机に向かっていました。わからないところは、学校で先生や同輩に聞いていたようです。あの頑張りには、我が娘ながら感動をしました。

ですが、いかにせん、あまりに短時間の突貫工事、志望する獣医学部など足元にも及びませんでした。ですが、獣医学部のある大学へ行き、頑張っただけで編入するといって、帯広畜産大学へ行きました。行く大学などどこにもない成績であった娘が、曲がりなりにも国公立大学へ行ったことは、親として嬉しく思いました。その後、笑いましたが、娘は大学で解剖の実習があった際、初めて出血場面を見て、恐い、無理、と思ったようで、獣医は諦めました。

ですが、大学を卒業する際に、とんでもないことを言い始め驚かされました。今度は医学部に行きたい、と言い出したのです。血を見るのが恐い人が何故医学部、と言うと、実習で次第に慣れてきて恐くはなくなったことと、脳障害のある子供の乗馬体験のボランティアを通して脳科学に興味を持ったことと、人を助けたい、と思うようになったため、と言っていました。まあ、とりあえず頑張ってみたら、と励ましはしたものの、その成果は疑問でした。もちろん、一般の受験ではなく、同じ北海道ということで旭川医大の地域枠での受験でしたが。案の定、1年目は1次で不合格。2年目は1次は合格したものの、2次の集団面接で不合格。この時、2次面接に残っていた者は娘以外全員社会人。社会人に完璧に打ちのめされ、社会人には勝てないと悟って、医学部進学は諦めました。今は、全く畑違いの建築会社に勤め、いろいろな資格を取りながら、設計に関わっています。基本的に勉強することは苦にならないようで、今も時折、医学系の本を見たりしているようです。娘の伴侶は大学時代の同期。娘のよき理解者で、いい人に巡り合ってくれたと思っています。

<保護者の方々にも読んでいただきましょう>

[進路通信]などの進路指導部が発信する情報の一部を親和女子高等学校HPでも閲覧できます。

《息子の進路》

姉と1つ違いの息子も、同じように公立高校へ進み、部活を3年間やり続けました。進学した高校には、私自身もよく知っているその道のベテランがいましたので、その人の元で学べば、ちょっとはうまくなるかな、と期待をしていました。ところが不幸なことに、その方は息子が高2になった時に転勤。それでも何とか3年間やり続けていました。学業成績は可もなく不可もなくといったもので、国公立大学は地方だと行けるところはあったのですが、本人は頑として地方へ行かない、家から通える大学に行くと言い続け、結局浪人。一浪した後にはセンター試験の結果を考えると、ワンランク上の大学への進学が可能で、そこの方が経済系はしっかり学べるよ、と言いましたが、ほんのちょっとの挑戦を嫌がり、安全圏の兵庫県立大学へ進学。大学時代は特に何かの資格を取るわけでもなく、サークル活動にいそしんでいました。就職で初めて地方へ配属となり、そこでカルチャーショックを受け退職。その後いくつかの企業に勤めましたが、年配者受けする性格と嫌と言わず仕事を引き受ける質であったことが災いして、心労でダウン。今やっと落ち着いたIT企業で仕事をし、資格を取りながら、やっています。伴侶となる女性は、介護士の仕事をされており、なかなかハードな仕事であり、時間的にすれ違いが多くなりそうですが、互いが人として尊敬し合っているのが、見ていて微笑ましい限りです。

《二人の違い》

子供らに部活をやり続けることを言ったのは、私自身が高校時代部活をしていなかった(もっとも部がなかったというのもある)こと、初任校で文武両道に努める生徒に感銘を受けたことが大きかったため。

二つ目の国公立大学への受験しか認めなかったのは、高校時代に教科を絞らずできるだけ多くの教科を学び、その知識・経験をもって大学で学んでほしいという思いから。全国区で考え、女の子だから自宅から通える範囲の大学、という意識は全くありませんでした。息子にいたっては、家から出て行け、とまで言いました。結局娘は地方へ行き、息子は家から通える大学へ、という結果になってしまいました。

娘はハードな受験勉強を通して、勉強方法を身につけ、貪欲な知識欲と共に、それを活用しています。一方の息子は、相変わらず人当たりの良さで好感度を上げつつ、IT関係の本を読み、データと格闘しています。今やっと勉強することに向き合っているのかな、と思います。二人を見ていて思うことは、大学というものに対する考え方、大学での過ごし方の相違が、今を形づくっているのかな、ということです。

受験する時に持っていた志望大学・学部へ思いは、入学後変化することは間々あることです。しかし、学び、研究する場としての大学というとらえ方と、漠然と自由に4年間を過ごす場というとらえ方の違いは、その後の人生に大きく影響してきます。息子のような後者の考え方をされる保護者の方々もおられるかと思えます。ですが、それが今や幻想になるうとしていることを知っておいて下さい。大学、特に私立大学はいかに学生数を確保するかにやっきになっています。その一方で、学生の質の低下に多くの大学教員は危機感を抱いています。ある大学教授にお話を聞いたことがあります。今名の通っている大学に非常勤講師で教えに行っていた時、授業開始になっても学生が私語をやめず、注意をしても効果なし。ご自分が属していた別の大学の学生では考えられないような現状を目の当たりにして、その大学のレベルの低下にあきれ果て、翌年は講師をお断りしたそうです。

名の通った大学に入りさえすれば、あとは安泰、と思っていますか。それこそ幻想でしかありません。大学教員にあきれられるような学生が闊歩する大学で、一体何を学ぶのでしょうか。そして、そこに在籍した学生に企業は何を期待するのでしょうか。大学は、これから次第に淘汰、再編成されていくことでしょうか。その中で何故私はその大学・学部を志望するのか。そしてその大学での学びを通して、なりたい自分にどう近づくのか。そのことを今一度、よく考えて下さい。大学の就職率、大企業へのコネクトなどではなく、たった一人しかないあなた自身の人生に必要なものは何なのか、を考え、大学・学部を選んで下さい。

<保護者の方々にも読んでいただきましょう>

[進路通信]などの進路指導部が発信する情報の一部を親和女子高等学校HPでも閲覧できます。